

ウルリム  
響

# 星 環

特定非営利活動法人

聖公会生野センター機関誌

第44号

2007年9月1日発行

題字：康秀峰

URL <http://www.nskk.org/province/ikuno>

E-mail: [ikuno@nskk.org](mailto:ikuno@nskk.org)

## 『和解と共生』の架け橋として

金秀男

私は、日本の植民地支配により、ふるさとを離れ渡日してきた両親のもと、日本で生まれ育ち、しかも韓国籍を保持しながら生活しているひとりです。幼少期から、青年期、そして老年期にさしかかろうとしている現在まで、執拗且つ陰険に繰り返される差別と偏見にさらされ、生まれ育った地を未だ故郷と受け入れることのできない中途半端な自分を発見します。私のアイデンティティーは何なのか、どこにあるのか、彷徨いながら答えを求めてきた人生のようです。結果今私は、〈在日韓国人キリスト者〉として、日本で生き続けることを選択しています。

さて、在日本韓国YMCAは、韓国YMCA全国連盟と日本YMCA同盟の双方に正式加盟し、アジア太平洋YMCA同盟、世界YMCA同盟に連なっており、この加盟の二重性に象徴されるように、ダブルの存在として、『和解と共生』の架け橋の働きを担ってきました。昨年創立100周年を迎

え、次の世紀も在日コリアンを始め、年々その割合を伸ばしている在日外国人、そして社会的少数者、弱者と共に歩いていくことを決意しました。同時に、世界平和を考える



上で避けて通れない東北アジア、中東を視野に、『和解と共生』の働きを拓けることも確認しました。そのひとつとして、厳しい状況にあるパレスチナの東エルサレムYMCAとの交流を継続中ですが、1948年のイスラエル建国、故郷を追われたパレスチナ難民、4度にわたる中東戦争、幾度か合意された平和への取り組み、長大な隔ての壁建設等々、多くの情報に接しながらも、二つの民が共存できる平和なパレスチナの実現に向け苦闘している、パレスチナ人クリスチャンを始め、そこで生き抜いて来た人々に関しては余りにも無知で無関心であったことを思い知らされます。

以前送信されてきたメール、件名・朝鮮人「ばか ニッポンから さっさと消えろ 目障りだ」を再度目にしながら、まだ〈在日韓国人キリスト者〉をやめるわけにはいかないと思うのです。

(きむ すなむ 在日本韓国YMCA 総務)

### もくじ

『和解と共生』の架け橋として/1

時のしるし 「金素月『招魂』に寄せて」/2

多民族・多文化共生のすすめ 真の「構造改革」は地域の草の根活動から/3  
日韓聖公会 社会宣教交流会に参加して/4

ウィリアムス神学館・夏季実習に参加して 生野での体験/5

写真 聖公会生野センター フォトギャラリー/6・7

韓国からのお便り 犬を食べた日/8

ハルモニたちとの3日間/9

こんな本あります 鈴木道彦『越境の時 一九六〇年代と在日』/10

詩『虚勢者』/11

ご案内・余韻/12

私は40年近く前、1968年に大阪外国語大学朝鮮語学科に入学した。1年生の終わり頃だったか、金素月という詩人の「チンダルレ」(つつじ、「山有花」という詩を習い、とても感動した。この詩を知っただけでも、朝鮮語を学んでよかったと思った(金素月の私訳は私のホームページhttp://www.002.upp.so-net.ne.jp/izaya/Kimsowol.htmをご覧ください)。

金素月は1902年に平安北道亀城の出身。日本統治下で成長。1923年、日本に留学するが関東大震災に遭って帰国。ソウル南山に朝鮮神宮が創立された1925年に、詩集『つつじの花』を出版。1926年から東亜日報亀城支局を開設、経営。1934年12月24日、服毒自殺。32歳。翌年、日本はキリスト系学校に神社参拝の強制を本格的に開始した。

『つつじの花』の中に「招魂」という詩がある。以下は私訳。

こなごなに砕けた名まえよ！  
虚空の中に散った名まえよ！  
呼んでも主人のない名まえよ！  
呼んでから わたしが死ぬ 名まえよ！

心の中に残っている言葉ひとつは  
とうとう終わりまで 言うことができなかった……  
愛していた その人よ！  
愛していた その人よ！

赤い太陽は 西山の頂にかかった。  
鹿の群れも 悲しんで鳴く。  
くずおれてしゃがんだ 山の上で  
わたしはあなたの名前を呼ぶ。

悲しみに絶え入るまでに 呼ぶ。  
悲しみに絶え入るまでに 呼ぶ。  
呼ぶ声は 進みゆくけれども  
天と地の間は あまりに広い……

立ったまま この場に 石となろうとも  
呼んでから わたしが死ぬ 名まえよ！  
愛していた その人よ！  
愛していた その人よ！

その時、そのように死ぬべきではなかった人たちのことが、私の胸にも去来する。平和であれば、暴力の支配がなければ、その人が人としていくらかでも尊ばれたら、その人はそのように死ぬことはなかったであろう。

あるパンフレットにこう書かれている。  
「終戦直後の1945年8月24日、舞鶴湾内で、海軍輸送船・浮島丸は突然の爆発によって沈没しました。

「浮島丸のいと 金素月」に寄せて

井田泉

浮島丸は戦争中に青森地方で土木労働を強いられていた朝鮮人労働者とその家族数千人を乗せ、故郷朝鮮に帰国途中でした。この爆沈によって朝鮮人524人、日本人乗組員25人が死亡しました。」

岸壁から、村から町から、山から、どれほどの人の叫びがこだましたことであろうか。

立ったまま この場に 石となろうとも  
呼んでから わたしが死ぬ 名まえよ！

「土木労働を強いられていた朝鮮人労働者」の多くは、強制連行で日本に連れてこられた人々だったという。20年前に亡くなった金素月は、地の中からこの人々の名まえをも呼び続けていたであろうか。

浮島丸で遭難した遺族や生存者は、日本国を相手に謝罪と損害賠償を求める訴訟を起こした。2001年8月23日、京都地裁は、国の公式謝罪を求める訴えは認めなかったものの、国の安全配慮義務違反を認め、生存者に慰謝料を払うことを命じる判決を下した。しかし、2003年5月30日に大阪高裁はこれを覆し、原告の請求を棄却した。

舞鶴の人々は、浮島丸が沈没したとき、少しでも多くの人命を救助しようと尽力した。1954年から犠牲者慰霊祭が行われるようになり、現在に至るまで党派、宗教をこえて市民の手で続けられている。その基本的考え方は、「国家の加害責任の犠牲になった朝鮮の人たちの慰霊と追悼を日本人自らの責任で行う」ことだという。事件を風化させないために1978年には慰霊碑が建てられた。またそのような努力の積み重ねの中から、映画「エイジアン・ブルー」が製作された。

日本戦没学生の手記「きけ わだつみのこえ」(岩波文庫)の最初に、渡辺一夫訳でジャン・タルジューの詩が載っている。

死んだ人々は、還ってこない以上、  
生き残った人々は、何が判ればいい？  
死んだ人々には、慨く術もない以上、  
生き残った人々は、誰のこと、何を、慨いたらい？  
死んだ人々は、もはや黙ってはいられぬ以上、  
生き残った人々は沈黙を守るべきなのか。

死んだ人イエスは今も語りつけておられる。それを聴き、それに動かされて生きるのが私たちの信仰である。とすれば、私たちは死んだ人たちの沈黙させるべきではないし、私たちも沈黙すべきではない。死んだ人の声と悼む人の声を非戦平和のために結び合わせていかなければ。

(いだ いずみ 京都聖三一教会牧師)

真の「構造改革」は地域の草の根活動から  
=生野での取り組みから=

金光敏

自治や分権が今キーワードだ。地域に生きる人々が、相互に係わり合いを持って、共助関係を築いていく。こうした関係づくりや街づくりは、日本社会に今もっとも必要な「構造改革」であることを主張したい。小泉政権以降、「改革」の名の下に競争原理が万能とされ、数値目標などとは縁遠い、教育や福祉の現場にさえ、経済評価が当てはめられ成果を競わされている。異常な状態だ。「構造改革」を通じて、行政コストを下げ、財政削減を図り、赤字体制から脱却を図るのだという。だが、現政権の行政コスト削減の核心部は、果敢なる生活支援の削減だ。本来の「改革」であるはずの談合防止のための指名競争入札の廃止、官僚の天下り禁止などは放置されたまま、権力の中核は高コスト、非効率、不条理に満ち満ちている。

結局、「構造改革」を叫んだ小泉政権も、それを引き継いだ安倍政権も、高コスト体質の官僚機構を弱体化させることになら成功していない。日本の「構造改革」は失敗している。

私たちが現在推進中の生野区の街づくりは、本当の「構造改革」を目指していると言える。聖公会生野センターの呉光現総主事も加わって、地域のさまざまな人々によって運営される生野区地域福祉アクションプラン推進委員会は、この間、在日韓国朝鮮人・外国籍住民部会が検討してきた「民生委員・児童委員の委嘱の一部緩和に関する提案」を内閣官房に提出した。地域福祉の要である民生委員・児童委員に外国籍者でも委嘱されるよう規制緩和を求める地域再生特区を提案した。

民生児童・児童委員は、民生委員法に基づき市町村で選挙権を有する地域住民から推薦され、委嘱されることになっている。民生委員法に国籍条項の明示はないが、実質的に外国籍住民は排除されている。

私たち生野区地域福祉アクションプラン推進委員会 在日部会では、昨年3月に2ヵ年にわたり取りまとめた「生野区地域福祉アクションプラン」に基づき、生野区が外国人住民集住区であり、高齢化率が高いという地域性に鑑みて、多様な人材による地域福祉への参画を促すために、民生委員・児童委員の国籍条項の撤廃を議論してきた。

現在、民生委員・児童委員の国籍条項撤廃については、滋賀県旧米原町に前例があり、このときは法律改

正の提案であった。結果は、一蹴されている。今回、私たちは、生野区だけの限定的な地域特区を提案した。なんとか認めてほしいという意気込みで。

しかし先日、内閣官房を通じて所管とする厚生労働省の回答が届いた。答えはNO！理由は、民生委員・児童委員は、児童虐待などの事案に子ども保護などで公権力の行使が認められているからだという。申請してから2週間余りでの回答。ピシッと「だめだ」。興ざめする。

厚生労働省はまともな検討などしていない。なぜなら民生委員・児童委員の役割を把握した上で、福祉サービス受給者に外国籍住民が多数いること、そして地域福祉の担い手に外国籍者が大きな役割を果たしていることをあげ、地域の限定的な特別措置として規制の緩和を求めたのだ。しかしその答えは、「公権力の行使を行う公務員には国籍が必要」だった。

回答はまったくのピントが外れだ。日本政府は経済や地域の活性化の推進を掲げて、団体、個人、自治体、企業からさまざまな政策提言を受け付けている。しかし、その「YES」「NO」の判断が、既得権益を守ることに懸命な官僚の裁量権に委ねられていて、特区提案などそもそも通るはずもない。

私は今回の提案こそが、真の「構造改革」の試みだと考えている。なぜならば、地域のことを地域の人々に委ねてほしいという提案だからだ。こうした共助の地域社会が進み、地域の自治力が高まれば、強大な官僚機構など必要ない。まさにこれこそが公共コスト軽減の核心だ。日本の官僚機構は、公共コストの削減にもっとも大きな反対勢力だ。この高コスト体質の日本の官僚機構を温存させて、小泉政権も、安倍政権も「改革」の言葉を多用した。断言しておくが、彼らの「改革」よりも、地域の草の根で胎動しつつある「協働」こそが、真の「構造改革」だ。現政権の「改革」が生活破壊を生んだならば、私たちの「改革」は地域の共助社会の創造を生む。

我々に選挙権はないが、次期総選挙ではこの度の参議院選挙でも大きな変動があったように、真に在日外国人の共生を実現できる候補者に一票を投じて欲しい。

(きむくあんみん コリアNGOセンター事務局長)

## 日韓聖公会 社会宣教交流会に参加して

木村直樹

6月26日（火）から29日（金）の三泊四日、ソウル近郊の坡州を会場に、日韓聖公会社会宣教交流会が開催されました。これは2004年に行われた日韓聖公会宣教協働20周年大会の共同声明の合意項目の4にある「両聖公会は管区次元での社会宣教（社会正義、平和、人権、福祉、教育）などを担っている人たちの交流を推進する」に基づいてのことです。

日韓聖公会の正式な交流は、1984年に開催された「第1次日韓聖公会宣教セミナー」から始まりましたが、日本聖公会は、このセミナーをとおして、宣教におけるアジア的視点を得たということが出来ます。アジア的視点とは、日本社会と日本の宣教をアジアの視点から見直すということです。このセミナーの共同声明では「植民地支配の容認し、その後もその事実について何らの謝罪もしてこなかったことに対する懺悔と陳謝」「歴史の歪曲・経済支配・文化的偏見と差別を拒否することの決意」「在日差別問題を宣教課題として認識すること」「聖ガブリエル教会への支援」などが謳われています。このような認識が、1996年の総会で決議された「日本聖公会の戦争責任に関する宣言」に結実してゆくのです。

第1次日韓聖公会宣教セミナーでは、日本聖公会の宣教の姿勢が、大韓聖公会から鋭く問われたわけですが、20周年大会では、両聖公会の宣教理解の一致が確認され、今後両聖公会は、さらなる協働関係を発展させてゆくことになりました。

「社会宣教」という言葉は、日本聖公会ではほとんど用いられない言葉です。今回の交流会をとおして、わたしたちは大韓聖公会が「社会宣教」という言葉で表現しているものを、具体的に理解することができました。

従来、宣教という言葉は、伝道と同じことを意味しているとされてきました。しかし現在では、宣教は、「神の宣教」という言葉で現されている、神ご自身がこの世界に対して教会を超えて働いておられるそのみ業に、教会が参与してゆくも



毎水曜日の昼休みに開催される「水曜おにぎりコンサート」。ソウルのビジネス街で開催。当日のキャンパと同金額を企業が寄付している。この資金で大韓聖公会のフードバンク（配食等の社会宣教事業）の活動が支えられている。コンサート終了後の舞台の前での日韓社会宣教交流会参加者の記念撮影

のであると理解されています。イエスの父である神は、この世界で「小さくされている人々」に、殊に、そのみ業を現しておられます。そして伝道とは、そのような神の宣教のみ業に参与する人々を探し求めることに他なりません。ですから大韓聖公会の社会宣教の意味するものは、日本聖公会にとっての宣教そのものと言ってよいのだと思います。

大韓聖公会の社会宣教は、1980年代の韓国社会の矛盾の中で始められました。80年代までの韓国社会では、経済成長第一主義と軍事独裁政権によって、多くの労働者が低賃金と長時間労働という苛酷な境遇の中での生活を強いられていました。韓国のキリスト教界は、このような状況の中で、労働運動や民主化闘争を支援しますが、大韓聖公会の青年たちは、貧しい地域に移り住み、彼らと生活を一つにすることから、その運動を始めます。彼ら自身が「小さくされた人々」となり、「分かち合いの家」を誕生させるのです。「分かち合いの家」は、その地域の人々の生活と必要に根ざした働きでした。

「分かち合いの家」は現在、ソウル教区だけではなく、テジョン教区、プサン教区へと広がっています。また「分かち合いの家」が理念だけではなく、地域に住む人々の具体的な必要に応えることを課題としたことから、聖公会員のみならず社会の広範な支持と共感を得、ついには行政から事業の委託を受けるまでになっています。

今回、わたしたちは南揚州市の外国人移住労働者センター、クリ市の「障がい者」総合福祉館、そして野宿労働者の自立支援を行っているヴィジョントレーニングセンターを訪ねましたが、いずれも行政の全面的な支援を得たかなりの規模の社会事業でした。しかし最後に訪問した龍山分かち合いの家は、分かち合いの家の草創期を偲ばせるもので、小さな家に、子どもたちが多数集まり、遊んだり勉強に励んだりしていました。またこの地区に多く住むフィリピン人のために、フィリピン聖公会の女性宣教師が、招聘されて働いていました。

社会の必要性から誕生した教会の活動が、行政の支援を受けて大規模な社会事業となってゆくということは、現在の日本社会では考えられないことです。そういう意味で、大韓聖公会と日本聖公会の置かれている状況は異なります。

しかし一方で、「小さくされている人々」の必要に応えようとする宣教の姿勢は同じであることも確認できました。今回の交流会には、日本側から、聖公会生野センターの呉光現総主事と名古屋学生青年センターの池住圭主事も参加しました。両センターとも地域の「小さくされている人々」への具体的な必要に応える活動をしています。

今回は、相互理解のための講義と施設見学が主でしたが、今後は、社会宣教の具体的な現場同士の交流が求められると思います。

（きむら なおき 司祭 北関東教区宣教部長）

## 生野での体験

出口 崇

7月11日から15日まで、ガブリエル教会の牧師館を拠点に、「教会の社会宣教に学ぶ」というテーマのもと、生野、釜ヶ崎実習をさせていただきました。

聖公会生野センターでは、まず呉総主事から、戦前、戦中、戦後と続いている在日韓国朝鮮人の方々の抑圧されている歴史、現在も制度上解決されていないために被っている具体的な不利益について、そしてそれらの様々な問題を解決し、生野地域での多文化の共生を目指した活動を行っている聖公会生野センターの働きやガブリエル教会の歴史などについて学びました。

翌日からはセンターの実際の活動に参加させていただきました。在日1世のハルモニ（おばあさん）たちのデイサービスセンター「のりばん」と、同じような働きをされている「あんぱん」の2組に分かれてハルモニたちとの楽しい時間を過ごさせていただきました。私は「あんぱん」におじゃまし、朝から夕方まで1日ご一緒させていただいたのですが、常に話し声と笑い声が途切れることがない、あつという間のひと時でした。くつろぎの「居間」に紛れ込んだ珍客を「パンガッスムニダ（お会いできてうれしい）」というとても素敵な歌で歓迎してください、彼女たちからたくさん元気をいただきました。

また、「くりんモダン美術教室」でも、お子さんが教室にいる間、隣の部屋におられるお母さん方の井戸端会議に加えていただき、「いかに母は強いか」ということを（お連れ合いのいる神学生などは特に）戦々恐々として聞かせていただきました。お母さん方のくつろぎの場にも、おじゃましたにもかかわらず、暖かくもてなして下さったことは感謝です。

ちょうど90回目の「こみち寄席」が実習期間中にあり、そのお手伝いもさせていただきました。生の落語は、奈良基督教会の礼拝堂で見て以来で、

地域の方と共に、楽しいひと時を過ごさせていただきました。

私は幼児洗礼を受けたので、気が付けば教会に行っていました。初めて教会に行く方にとってその第一歩はとても勇気のいることだったと聞きます。言い換えれば教会の敷居が高いということでしょう。しかし、こういったセンターの働きは、教会の敷居をどんどん低くしています。「教会の中から手招きする」だけでなく、「教会の外に出て、地域の小さな声に耳を傾け、その人たちと共に行動を起こす、その場を提供する。そして、その地域の他の人たちをも巻き込んでいく」という教会のあるべき宣教の姿を学ばせていただきました。

今回お世話になった、ハルモニたちが集う場所は「のりばん（遊び部屋）」「あんぱん（居間）」という、そのままの自分で居ることのできる場所という意味の名前ですが、教会もそのままの自分が受け入れられる、「のりばん」であり「あんぱん」であれば、イエス様が共におられ、礼拝を捧げるだけでなく、笑いながら一緒に飯を食う場であればいいな、と思いました。

今回、実習生を受け入れてくださった聖ガブリエル教会、こひつじ乳児保育園、聖公会生野センターの皆様、ことに釜ヶ崎での実習もコーディネートしていただいた呉光現総主事に心より感謝いたします。

（でぐち たかし 京都教区聖職候補生）

あんぱん：大阪府の制度「街角デイハウス事業」を活用して運営。聖公会生野センターから歩いて10分ほどだが、行政は東大阪市。大阪市には同様の制度はなく「のりばん」は聖公会生野センターが行政から補助金を受けずに運営する自主的な活動である。

### のりばん ボランティア

「のりばん」に来るようになって、早や2年になりました。きっかけは、先輩の「少しお手伝いすればおいしい韓国料理がいただける」という一言でした。

食べることの大好きな私はすぐさまやって来ました。ところが、ここは、美味しい料理がいただけるというだけの所ではなかったのです。ここで出会った人たちに、実に多くのことを教えてもらいました。そして食文化にとどまらず、ドラマ、映画、音楽、踊りなどの韓国文化にドップリひたってとても幸せです。

部屋に漂う「おいしそうなおい」とハルモニたちの「元気な声」が活力を与えてくれます。

これからも、少しでも長く続けられるよう願っています。(こんどう ともこ)



近藤朋子さん

# 聖公会 生野センター

## フォト ギャラリー

### こみち寄席90回記念



熱演する桂春駒師匠と笑福亭仁嬌師匠



自慢の昼食の前で「ピース」

### デイサービス

### デザインを楽しんでいます



石井ゆみさん

クリンもだん美術教室の金・土担当の講師です。本業はグラフィックデザイナー。4歳からの受講生と共に、将来の「雑貨の商品化」に向けて燃えています。私たちがつつい見過ごしてしまう「作品の商業性」を大切にしながら、一人ひとりのキラッとした個性の発掘に努める人です。

美術展のポスター、DMの斬新なデザインは彼女の本領発揮でしょうか。

(文：呉光現)



イカ釣り漁船の前で、全体写真を・・・。

### のりばん済州島の旅

30年ぶりに故郷の村を歩く。笑顔がとてうれしい。

# 犬を食べた日

中村 香

その日はビニールハウスで働き始めた彼の、本当に久しぶりの休日だった。昼まで寝ようと朝日の中で微笑みながらウトウトしていた二人の間で電話が鳴った。彼の両親からだ。

今から来ると言う。

彼女はとっさに飛び起き、ごちゃごちゃと何かつばやきながらも大掃除を始めた。

両親はやって来た。肉をたずさえてやって来た。

「さんじゅんに食べさせなくてはいけないの」。

彼に滋養強壯の料理を食べさせたくて持ってきた。丸々後ろ足一本の大きな肉の塊を鍋に入れる。鹿肉だという。彼女は前にも、韓国の実家で鹿肉を食べたことがある。親戚の叔父さんが趣味の狩猟でしとめたという鹿の肉だった。食べてみたら散發弾がコロコロと出てきた。シオモニ（義母さん）は言った。

「二度茹でして油とるから、カオリも食べなさい」。

彼女はアトピーのため、健康のため、肉を控えていた。彼らが田舎に来てからは肉を買ったことが無かったが、肉を食べる機会は多かった。韓国では人が集まると、肉を食べるからだ。

そうしてゆでた肉をシオモニは手で小さく裂いていった。彼女はアボニム（義父さん）に勧められた韓国焼酎、ソジュを飲んで、半分やけになっていた。（身体も随分良くなったし、いっぱい食べちゃえ）。

ゆでたての肉はやわらかく、湯気をあげながらつると光を放っていた。塩をつけて、ソジュを片手に肉を流し込む。肉を、食べる、食べる。

うまかった。

「沢山食べてくれて嬉しい」と、両親はやけに喜びながら、彼女を見ていた。残った肉を煮込んでスープを作ってくれた。



食べ損ねた豚…「笑い豚」が縁起がいいそうなの

お隣さんにもおすそ分けをし、一晩泊まって両親は帰って行った。

彼女はソウルに住む日本人の友達に報告のメールを送った。突然両親が来た

が、何事もなく無事に帰って行った。鹿肉を食べた、と。

次の日の夕方には大家さんが来て、建築祝いに夜ご飯を食べに来いと言うので行ってみたら、黒ヤギの焼肉だった。彼女の家の真横は黒ヤギ農場で、その黒ヤギたちのどれか一匹だった。彼女は毎日黒ヤギを見ながら思っていた。

（黒ヤギは食べない、彼らだけは食べるまい）、と。

今、彼女の目の前には鉄板の上にジュージューと焼ける肉が広がっていた。黒くもなく、ヤギっぽくもなく、ただの肉だった。韓国風どぶろく、マッコリを片手に、黒ヤギを食べた。黒ヤギを食べた。祝いの日だからと、豚の頭が飾られていた。豚の口にはお札がくわえられていた。来た客が、これからうまくいくようにと豚に礼をして、口にお金をはめる慣習がある。後半になると豚の頬をそぎとり、それをジュージューやっていたが、さすがに彼女は、食べられなかった。

彼女の友達からメールの返事が届いていた。

「かおりちゃん、それは、犬の肉だよ、、、」。

彼女は彼を問い詰めた。彼は笑いながら、

「いやいや、鹿の肉だよ」

と言った。隣のオンニ（お姉さん）が言った。

「ケコギ（犬肉）だと言ってうちに持って来たじゃない」。

彼女は鍋に入った丸々後ろ足1本を、生々しく思い浮かべた。しみじみと思った。

（鹿の足はもっと長いだろう、、、）

肉を食べることにおいては、豚も牛も犬も基本的には一緒だ、と彼女は思っている。食べる人を非難することはしない。しかし、世界中を旅して昆虫を食べることはあっても、韓国において犬だけは食べることはないだろうと思っていた。何よりもだまされて食べさせられたことが悔しかった。彼女は怒って両親の悪口を言った。そして彼に宣言した。

「シオモニが作った料理は絶対食べない！」

夏になって、彼らはもっと忙しい。彼は自分の農業に専念したいとビニールハウスでの仕事をやめ、めでたく二人は朝から晩まで働いている。朝から雨が降って、「今日は休みだ」と喜んでいた彼らの間に電話が鳴った。

両親が来ると言う。

夜には彼女は、シオモニが作った真っ赤な鳥鍋を、ビール片手に美味しくほおぼっていた。

彼女は、他の生命を食べて自分の命を生かしている。

（なかむら かおり 韓国在住）

# ハルモニたちとの3日間

村上尚子

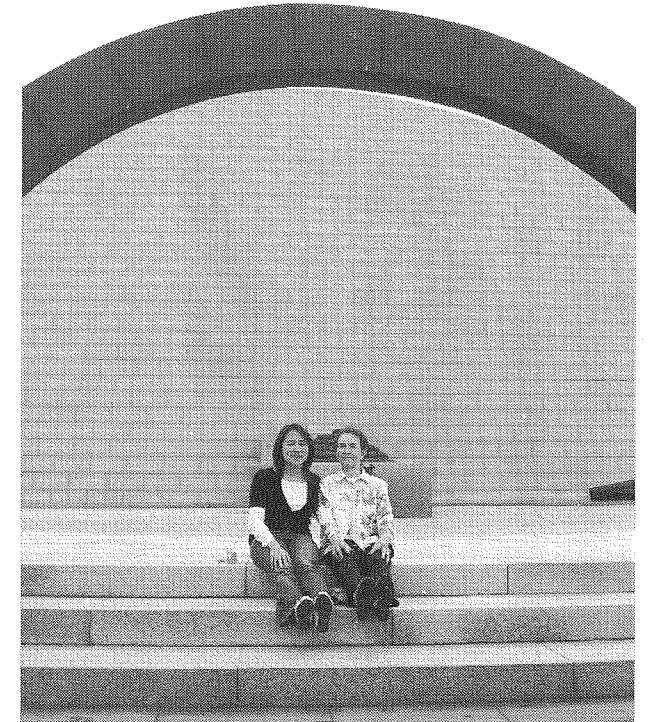
「あんた、どっかで見たことあるわ。」済州国際空港に到着してバスに乗り込んだハルモニたちに挨拶をすると、ひとりのハルモニが声をかけてくれた。もう3年ほど前になるだろうか、ハルモニたちに会いに数日間ののりばんに通ったことを何となく覚えていてくれたのだ。済州島に留学中だった私は、呉光現さんから連絡をいただき、今回の旅行に同行させてもらうことになった。再会の場所が、ハルモニたちの故郷である済州島だということが嬉しかった。3年前より少し元気のなさそうなハルモニもいたが、それでも済州島の地を踏みしめる足取りは、のりばんの仲間たちと故郷に来た——なかには数十年ぶりの訪問を果たしたハルモニもいる——その喜びに溢れ、しっかりとしていた。5月の島の陽光がハルモニたちを出迎えた。

それにしても、あんなにも「自由な」ツアーは初めてだった。事前に決められた計画はほとんどなく、どこに行きたいか、何を食べたいか、何をしたいか、すべてその場でハルモニたちの希望を聞いて決める。14人もいるから当然意見が分かれるのだが、そこは呉さんがうまくまとめる（なだめる）。そんな「自由な」要求に、地元の若い運転手さんが精一杯応えてくれた。時おりハルモニたちの口から飛び出す済州島の言葉に優しく目を細めながら。

最後の故郷への旅になるかもしれない・・・そうした思いを胸に訪れたハルモニたちもいて、4日間、思い思いに島と向きあっていた。

2日目の昼。島独特の黒い火山岩がゴツゴツと広がる城山浦近くのある海岸で、ひとりのハルモニが、波打ち際に適当な場所を決めて腰を下ろした。大阪から準備してきた布を広げ、お供え物の果物や米、酒などを海に撒き、そして布に火をつけた。ハルモニの家族の多くがこの島の海に出て生計を立てていたという。供養を終えて私の横の席に戻ってきたハルモニのからだ全体から、帰郷の目的を無事に果たせた安堵の雰囲気伝わってきた。

この日の午後、釜山<sup>釜山</sup>金昌厚先生（済州4・3研究所理事）の案内で、4・3平和公園を訪れた。島の8人に1人が虐殺されたといわれる「済州4・3事件」は、済州島を故郷とする人ならば、その親戚や友だち、隣人に被害のない人はいないといえる



済州島4・3平和公園のモニュメントにて

ほどの傷跡を残した。慰霊の空間で、知り合いの位牌を見つけてなでるハルモニ、犠牲になった友人の位牌が安置されていないことに気づくハルモニ……。真相糾明の進展状況を聞いて感心しながら、「在日済州島出身者からの被害申告がまだ不足しているんです」という金先生の言葉にハルモニたちは小さくうなずいた。

あいにくの暴風雨にみまわれた3日目は、島の絶景をバスの中から眺めて回った。夕方になって市内近くに戻ってきたバスが、一周道路を折れて、トルタム（石垣）に囲まれた家々の間をくねくねと進んだ。「ここで降りよう」。周りに促されて、白髪によく似合うハルモニが、数十年ぶりに、生まれ育ったトンネ（村）を歩く。小さかった頃は、土の道だったに違いない。それでも、ハルモニの目には昔の風景が浮かび重なり合ったことだろう。私は、後ろ姿を見つめながら、植民地期に渡日したというハルモニの一生に思いを馳せた。その頃にはすっかり雨もあがり、海をバックに、初めて全員で記念撮影をした。

「来年も来よう！」

島はハルモニたちに元気を与えてくれたようだ。（むらかみ なおこ 津田塾大学大学院博士課程在学）

## 鈴木道彦『越境の時 一九六〇年代と在日』（集英社新書）

### 磯貝 治良

1950年代から60年代にかけて、在日朝鮮人をめぐるとの二つの事件が、在日社会に衝撃をあたえ、日本社会を震撼させた。

一つは「小松川事件」と呼ばれた。1958年8月17日から行方不明になっていた都立小松川高校定時制の日本人女子高生が、四日後に同高校の屋上で死体となって発見された。その前後に新聞社や女子高生の父親、警視庁などに犯人であることを示唆する電話がかかり、遺品が送られた。「犯人」として逮捕されたのが十八歳の李珍宇少年だった。一審、二審とも死刑判決、最高裁は上告を棄却して刑が確定した。翌1962年11月に異例の速さで死刑が執行された。現在もなお、冤罪の疑いが払拭されていない。

いま一つは「寸又峽事件」と呼ばれた。1968年2月、静岡県清水市で金銭トラブルから二人の暴力団員を射殺した金嬉老が、寸又峽の旅館でライフル銃とダイナマイトを持って宿泊客を人質に籠城した。金嬉老は暴力団員の不実を糾すとともに清水署刑事の民族差別に対して謝罪を要求した。テレビは四日間にわたってリアルタイムで事件を報道。彼は結局、記者に扮した警察の特別捜査班員に逮捕された。

二つの事件の背景には、朝鮮人差別の厚い層があった。震撼させられた日本社会はその事実を隠蔽して、殺人事件、ライフル魔事件としてやり過ぎすかに見えた。しかし、みずからの民族責任に向き合おうとする日本人がいた。著者もその一人だった。植民地体験者でも植民者二世でもなく、フランス文学者である著者が、李珍宇と金嬉老によせた強い意思と行動の根っこは何だろう。

その「なぜ」が、著者自身の自己省察という方法をとって、知的かつ平明に解き明かされるのが、この本である。著者は青春期に「嫌悪すべき自我」

に束縛されていた。それを克服するためにブルースを読み、サルトルの「独自の普遍性」という思想に出会う。「私の《我れ》は、意識にとって、他の人々の《我れ》よりもいっそう確実だということはない。ただ、いっそう親密なだけである」というサルトルの言葉が、この本には二度引用されて、結語にもなっている。

「他者へのまなざし」によって「自我」を超える、このような思想が根っこにあって、植民地宗主国の国民であった日本人の「民族責任」をみずからに問う営みが現実化されたのである。

さらにアンガージュマン（政治＝社会参加）の実践が著者を行動する知識人にする。フランス留学中にアルジェリア民族解放戦線に接触し、60年代のベトナム反戦運動にかかわり、やがて「日本人問題」として李珍宇や金嬉老に向かい合った。そのプロセスは、日本人が〈在日〉と向かい合うときの、ある誠実なモデルを伝えてくれる。

主体と自由、想像といった実存的な主題設定によって、法体系や社会規範では裁くことのできない死刑囚李珍宇の内面と行為に迫ろうとする。一方、金嬉老公判対策委員会の発足に参加し、「朝鮮人の主体」をめぐって金嬉老と対立しながら、日本人としての「民族責任」を深めようとする。それらのプロセスは裁判闘争のドキュメントとともにリアルに記述されている。

この本の意味はきわめて今日的である。いま政治権力、マスメディア、そして朝鮮民主主義人民共和国への憎悪によって思考停止におちいった国民——それらが野合して、「責任回避＝無反省史観」がこの国をおおっている。この本は、60年代をやりなおしの出発点として、現在の虚偽的状况にノ一を突きつけている。

（いそがい じろう 在日朝鮮人作家を読む会代表）

従うべきときに我を張り  
我を張るべきときに萎縮する  
虚勢者  
愛を得られずに  
寂しい  
人生を  
強引に突進したり  
自慰しながらうずくまったりして  
ますます寂しく  
弱者気取りの  
独善的で傲慢ではた迷惑な  
人生を  
ひとりぼっちで生きている  
その姿があまりに  
憐れだ

### 虚勢者

### 丁章

丁章（ちょん・ちゃん）

1968年、京都市にて出生

大阪外国語大学Ⅱ部中国語学科卒業

現在、大阪府東大阪市在住

著書

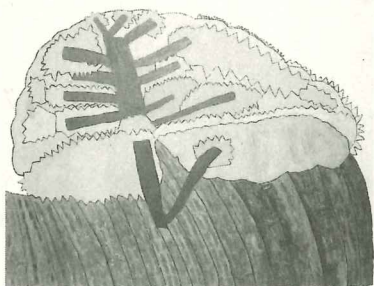
詩集『民族と人間とサラム』（新幹社）

詩集『マウムソリ -心の声-』（新幹社）

詩集『闊歩する在日』（新幹社）

丁章さんの詩集（第3集まで発刊）は  
聖公会生野センターでも取り扱っています。

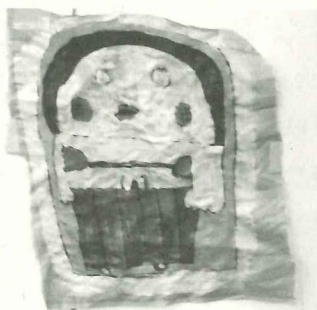
### 2007クリンもだん美術展 ・シンポジウム



聖公会生野センターの美術教室が今年も美術展を行います。今年はしょうがい者のアート作品の商品化の可能性についてのシンポジウムも開催します。受講生25名の生き活きとした作品を是非ともご覧ください。

【日程】2007年10月7日(日)～10月20日(土)  
午前10時～午後8時(最終日は午後5時まで)

10月7日(日)午後2時から「しょうがい者アートと商品化の可能性(仮題)」としたシンポジウム開催します。多くの方の来場をお待ちしています。



【場所】 應典院ウォールギャラリー  
(大阪市天王寺区下寺町1-1-27)  
電話 06-6771-7641  
地下鉄・近鉄「日本橋駅」から東に8分

### デイサービスセンター 「クリンもだん」 =利用者募集中=

芦田 聡

作業がきついなと思われる方や、少しゆっくりした時間を過ごしたいと思われる方に、ぴったりのサロン型のデイサービスです。主な内容は、アートや音楽を通してジコヒョウゲンをする事をモットーにしています！Tシャツに絵をプリントして販売を行った事もあります！本人の希望に即した無理のない時間の使い方の中で、共に成長していきます！充実したお昼ご飯はうちの自慢です。一度食べに来てください。

来年4月までに「地域活動支援センター」への移行を目指しています。多くの方の利用待っています。



音楽を楽しむ。ドラムの音色が聞こえますか？

### 余韻

■ 参議院選挙後、安倍総理の姿を見ていて、今回掲載した丁章さんの詩を思い浮かんだ。作者と読者では違う感性で同じ詩が見つめられている。■ 金秀男さんの一文は私の人生と重なり合っている。『「チョーセンジン」は差別されて当たり前』ということ「学んだ」のは小中学校の授業中の教室だった。あれから35年、教育では人権が大切であると謳われながら、「民営化」「競争原理」の追求で「人権」の切り捨てが始まっていると思うのは私だけだろうか？あまりにも有名な「坑道の中でカナリヤが死んだら危ない」。このカナリヤは今の日本社会で在日・しょうがい者・高齢者・家を持たない人々・・・、のような気がする。(ぴっくあんちゃ)

#### 聖公会生野センターへのご支援をお願いします

- ◇正会費 年額 1口 5,000円
- ◇後援会費 年額 1口 3,000円
  - ・郵便振込 00910-1-321780 「聖公会生野センター」
- ◇自由献金・クリスマス献金
  - ・郵便振込 00910-1-321780 「聖公会生野センター」
  - ・銀行振込 三菱東京UFJ銀行 東大阪支店  
普通預金 3711311 「聖公会生野センター」

発行所：聖公会生野センター  
〒544-0003  
大阪市生野区小路東1-17-28  
TEL06-6754-4356/FAX06-6754-4357  
E-mail: ikuno@nssk.org  
<http://www.nssk.org/province/ikuno>

発行人：宇野 徹  
編集人：大橋 襄

ウルリムは古紙100%の再生紙を使用しています。